



《 東京オリンピックに寄せて⑤ 》 灼熱 38℃ 選手と観客襲う！ 2020 東京



脱水症状でよろめきながら、一步一步ゴールを目指すガブリエラ・アンデルセン（スイス）に、スタンドの観衆が立ち上がって声援を送る。 “美談” として語り継がれる 1984 年ロサンゼルス五輪女子マラソンのワンシーンが、2020 年東京五輪で再現されることを危惧する人がいる。「フラフラになりながらゴールする姿は感動的と思われがちだが、命の危険を伴う。日本の夏は湿気の高さが特徴で、特にヨーロッパな

ど海外の選手には過酷だと思う」、1996 年アトランタ五輪陸上女子日本代表で、2003 年世界選手権女子マラソン銅メダリストの千葉真子さんが、首都・東京に潜む危険を指摘した。東京五輪の会期は 7 月 24 日から 8 月 9 日までの 17 日間。東京では今年のこの期間、最高気温が 30 度を超える日が 12 日あった。そのうち、東京五輪男子マラソンが行われる予定の 8 月 9 日に至っては 38 度の猛暑日だった。今年も 7 月 5 日以降、真夏日が続いている。東京消防庁によると、都内ではここ数年、7、8 月はそれぞれ 1 千人以上が熱中症で救急搬送されている。本番でもアスリート、観客ともに厳しい環境にさらされることが予想される。東京都は暑さ対策として、競技会場周辺に霧状の水をまくミストシャワーを設置する。選手が感じる暑さを和らげるため、路面の温度上昇を抑える特殊な舗装などを施す。打ち水の普及を図るなど、街を挙げての“おもてなし”も計画しているが…。

1912 年ストックホルム五輪男子マラソンでは、ポルトガル選手が脱水症状で意識を失い、翌日帰らぬ人となった。近代五輪初の死者だった。米メディアは、科学誌「ジャーナル・オブ・スポーツ・サイエンス」のデータをもとに、最も過酷だったのは 1900 年パリ五輪の男子マラソンだったとしている。当時の気温は 35～39 度で、半数を超える選手が途中棄権に追い込まれたという。

「東京五輪での男子マラソンが気温 38 度、もしくはそれ以上の中で行われることになれば、少なくとも過去 120 年で最も暑い環境下での開催となりそうだ」（米メディア）湿度の高い日本で行われる東京五輪は、体感温度が過去の五輪よりも上がる可能性が高い。特に長時間にわたって走り続けるマラソンは、灼熱（しゃくねつ）の太陽の下、多くの選手や観客が熱中症となる恐れがある。

千葉さんは「アスリートファーストという観点で言えば、午前 5 時頃のスタートが良いと思う」と提言している。大会組織委員会も、当初計画で午前 7 時半となっているスタートを前倒しする可能性を否定していない。猛暑への備えを進める東京五輪だが、「最大の懸案」は他にある。



♥ Happy Birthday 10/11・塚原 悠末君 10/12・今井 昂君 10/12・山崎 俊希君  
10/14・柴田 省馬君 10/14・松原 帆香さん 10/14・杉本 一輝君  
10/14・大滝 心遥さん 10/14・小原 奈央さん 10/14・浅井 愛美先生

(教員補助)